



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学校教育におけるジェンダー平等戦略 - 教育環境と教育内容に焦点をあてて - (V 学校でのジェンダー平等教育への取り組み)
Author(s)	直井, 道子; 福富, 護; 村松, 泰子; 大竹, 美登利; 高橋, 道子; 中澤, 智恵; 松川, 誠一; 眞鍋, 倫子; 木村, 育恵; 苫米地, 伸
Citation	
Issue Date	2007-12
URL	http://hdl.handle.net/2309/90507
Publisher	福島県男女共生センター
Rights	

V 学校でのジェンダー平等教育への取り組み（事例収集）

1. 概要

第 部で報告してきたように、本研究においては、2006 年度に公立の小学校と中学校の教師と生徒を対象とした質問紙調査を実施し、学校という場のジェンダー形成環境について分析検討した。本研究グループでは、その質問紙調査に先立って、学校におけるジェンダー平等教育への取り組みの実際について、関西地域の学校・教師に対するヒアリングを実施している。調査地や対象校は、諸々の制約から質問紙調査の対象と同一の条件ではないものの、学校や教員の抱える課題等を聴き取ることによって調査票作成への示唆を得た。

調査日時は、2006 年 3 月 23 日～24 日である。

調査対象は、関西地方における私立中学校、公立・私立高校、および公立小学校の教員である。

調査対象校の選定にあたっては、ジェンダー平等教育・男女平等教育、あるいは人権教育のネットワークや団体、教職員組合における自主的な研究会等から教育実践の情報と協力者を得て、ヒアリング調査を依頼した。

【図表 -1-1 調査校および回答者（教師）の概要】

	学校名	公私の別	別学・共学の別	中学・高校の附設	回答教員の性別	個人的な実践の有無
中学校	A中学校	私	女子校	中高一貫	男性	無
	B中学校	私	女子校	中高一貫	女性	無
	C中学校	私	女子校	小中高一貫	男性	無
	D中学校	私	男子校	中高一貫	男性	無
	E中学校	私	男子校	中高一貫	女性	無
	F中学校	私	男子校	中高一貫	男性	無
高等学校	G高等学校	公	共学校	高校のみ	男性	有
	H高等学校	私	女子校	高校のみ	女性	有
小学校	I 小学校	公	共学校	-	女性	有

関西地域においては、とりわけ同和教育・解放教育に関わる教員や学校の連絡組織が存在しており、実践と研究の蓄積が豊富である。学校の校務分掌に「人権（教育）担当」が位置づけられている点などは、他の都道府県と一律に比較できない、対象地域の特徴といえるだろう。

それらは、同和問題・部落問題への焦点にとどまらず、他の社会的マイノリティ問題全般に関わる人権教育へと視点を広げ、実践を進展させている。ジェンダー平等教育・男女平等教育や男女共生教育についても、人権教育の研究会の一部会に位置づけられていることから、そうした研究部会に参加する教員はある一定程度の問題意識を有しているものと考えられる。今回、こうした人権教育に関わる教員たちに対しても、ジェンダー平等教育に関してどのように取り組み、現在の学校環境の実態をどのように把握し、またどのような課題認識を抱いているのかについて、ヒアリングを実施した。

ヒアリングに際しては、すべての調査校に対して共通する質問項目として下記を提示した上で、各校の実態に即して自由に語っていただいた。

【図表 -1-2 ヒアリング共通項目】

概要	1	具体的な質問項目
実践の内容 （教育実践（授業実践）に関する内容）	2	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ、授業時数、方法、担当者（教員体制）等 ・当該授業の、学校での位置づけ（個人的取り組みなのか、組織的
		<ul style="list-style-type: none"> ・人権学習のなかでの位置づけ
		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の反応
		<ul style="list-style-type: none"> ・課題と成果
業以外で） 境整備の取り組み（授	3	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と、子どもとの関係づくりの面で、注意していること ・学級運営の面で ・別学という点で ・学校全体としてのジェンダー問題に対する対応 ・学校外の生活との関係で（生活指導や地域・保護者との関係等）
ついで	4	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のジェンダー・バイアスについて ・生徒は教師に対してどのように感じているか（相談相手、管理し
その他	5	<ul style="list-style-type: none"> ・その他

本ヒアリングにおいては、必ずしもジェンダー平等教育の実践の点で先進事例を収集したのではないため、次節において学校環境の詳細をヒアリング記録として示し、今後の教育実践の課題を検討する基本的資料として供したい。

2. ヒアリング結果

(1) A私立中学校

0) 回答者

人権教育を担当する男性教諭。もともとは地歴公民担当であるが、総合選択制をとる学校であることから、現在は学校設定教科を担当している。

1) 学校概要

小規模な私立女子中学校である。各学年が30人前後、1クラスずつの構成である。

生徒の多くが、スポーツのクラブ活動を重視して進学してきており、そうでないスポーツ競技を志向しない生徒はきわめて少数である。

系列の女子高校もあるが、高校の生徒数は中学校に比べると格段に大きい。

なお、共学化の予定はない。

・教員の年齢・性別構成

専任教員は現在中高合わせて40名くらいで、年齢構成は偏っている。20歳代は1人、30歳代は2人くらい。あとは、40代、50代で、若い教員が少ない。非常勤か常勤講師には若い教員が多い。性別構成としては、男性の方が多い。

・卒業後の進路

高校卒業後はほとんど進学。今年は就職状況がよくなったので、就職の生徒も多かったが基本的には進学である。総合選択制を採用したのも、社会に出て自分の個性を生かせる、資格を取ったり、社会で仕事をもって生きていけるように、ということを含めて考えて作っているので、教科としてもそういう内容を取り入れている。

2) ジェンダーに関わる教育実践(授業実践)の内容

ア) テーマ、授業時数、方法、担当者(教員体制)等

・人権教育の担当者

私（回答者）自身は高校の担任だが、小さい学校なので人権の係は中高を兼ねている。人権教育推進委員会も、中学校と高校の教諭が両方入っているが、取り組みとしては、義務教育とそうでないという部分で異なっており、中学校では人権教育計画を作って実施している。しかしながら、そのなかでとくにジェンダーに関する授業は、特別には行っていない。

（下に述べるとおり、）今までのところ、人権学習の中でもジェンダーをテーマに取り上げたことはなかった。高校では講演なども行われることがあるが。

また、他の中学校で行われているような、週1回のホームルームでクラス担任が人権教育をするという機会もない。拒否しているわけではなく、問題提起があれば実施することになるのだろうが、限られた授業時間の中で、これまでは優先的な学習課題として提起がなかった、と考えている。

・家庭科や社会科といった教科を担当している教諭の中でジェンダーに関心をもつ者があ
るかどうか。

教科単位での取り組みについては今まであまり把握していない。

家庭科については、本学では生活と技術だが、教科書にはジェンダーという言葉も教科書に出てくるので、内容としては授業で教えてはいる。社会科については、専任教諭はおらず、高校所属の教員か非常勤講師が授業を担当している状態である。

イ)人権学習のなかでの位置づけ

同和教育については、1970年前後に同和教育推進室ができ、専従の教諭を置いてきた。同和教育への取り組みには力を入れてきたという自負がある。同和教育推進室は、生徒の人権に関する相談室であると同時に、蔵書を相当数そろえた資料室でもある。現在は、それが人権教育という名称に変更されている。

人権学習の授業としては、大阪には『にんげん』という副読本があるので、それを使用して行っている。本学は中学校の生徒数が少ないので、全学年一斉に授業を行っている。二期制をとっており、学校行事もたくさんあるので、人権教育の授業に使える時間は年に2、3回くらいで、できることが限られているという現状である。

具体例として、昨年度、1限から4限までの時間を使って、車いすや点字の体験学習を行った。また、在日コリアンの方に来ていただいて、学年に分かれて直接話をうかがったり、民族衣装や民族楽器を体験したりする学習も、ほぼ毎年行っている。本学にも外国籍の生徒はいるので、そういう点でこの学習は必要だと認識されている。

かつては、外部から講師を招いての講演というスタイルが多かったが、どうしても一方通行になりがちだということで、体験や参加型学習を取り入れるように努めている。

授業自体は、人権教育担当の自分ではなく学年担任の教諭に任せており、中学校の状況

に応じた形で教材を選んでもらっている。まず授業案を、学校の代表者の会議に諮るために作成し、実施後、内容の記録を作成するようにしている。

・高校での実践との比較

高校では人権教育も学年毎にしている、前期・後期で1回ずつ、3年まで6回とれるので、中学校よりは若干テーマを幅広く扱える。本校の場合、長年、高校3年の最後の人権教育はジェンダーをとりあげてきた。かつては女性の自立ということで、社会で活躍されている人の話を聞くというスタイルが多かった。最近では、法律をとりあげたり、性をとりあげたりもしている。

3) 通常の教育・学習活動におけるジェンダー・バイアス解消の取り組み、あるいは学校環境整備としての取り組み(授業以外で)

ア) 学校全体としてのジェンダー問題に対する対応

・学校の教育目標に関わって

当校の建学の精神は「謙譲・礼節」である。かつては「良妻賢母」という言葉が出てくる女子教育が打ち出されていたが、良妻賢母という言葉が時代の流れにふさわしくないということで、学校の教育方針のなかからは外されている。

・オリエンテーション時の講話

中学生には入学時(4月)に、人権担当の私からオリエンテーションというか、20分ほど人権についての講話をする。その際に、ジェンダーフリーというか男女平等について少し触れるようにしている。人権全般の話から始め、とくに本学は女子校であるので、社会に出たときにどうだという話をする。

ポイントとしては、女性だから女らしくするというのではなく、あなた自身人間としてどうあるべきか、自分も含めてある種の決めつけをしていないだろうか、というような問いかけをしている。結論ありきではないように務めている。

しかしながら、中学入学したばかりの、とても緊張している時期のため、生徒の反応はあまりつかめない。1年生に入学したばかりだからあまり難しい話もできないし、でも「中学生になって、こういうことも考えようね」という投げかけとして話をしている。

イ) 教師と、子どもとの関係づくりの面で、注意していること

男性教員は、女子生徒に対する言動に気配りはしていると思う。これは主にセクシュアル・ハラスメントに関係している。本校では何度も、どういことがセクシュアル・ハラスメントになるかという職員研修をしてきた。研修は年2回、全教職員を対象として、人

権教育担当で企画・実施している。予算措置もされており、テスト期間中の午後に研修をするという日程をとっている。昨今話題になっているテーマを取り上げるようにしていて、昨年度については、特別支援教育がテーマだった。

昔はむちゃくちゃなことをいう先生もいらしたのが、そういう面では減ってきたと思う。例えばかつては、保健の授業のなかで、男性経験うんぬんの話を出して、「おまえはどうや」などということがあったと聞いている。あるいは、かつては男性の先生が無神経に身体を触るといったようなこともあったのだろうが、最近はそういうことにはしないように配慮するようになってきたかと思う。

ここ4年くらいの中に、学校内に、セクシュアル・ハラスメントに関する委員会もできた。幸いなことに今までには一度も起きていないけれども、なにか問題が起こったら対応するところを設けている。セクハラ委員会は、教職員内の問題も、生徒からの訴えも当然両方を扱う。学校外部の委員はおらず、内部のみでの対応なので、不完全ではあるが、一度も動いていないので、なんとも評価しきれない。

4) 生徒の現状について

・生徒のジェンダー・バイアスについて

スポーツのクラブ活動をしている生徒が多いため、中学校でも、髪の毛は短髪で、世間一般の「女の子らしくする」「容姿を気にする」ということでの問題はない。ある程度の年頃なので化粧やおしゃれには興味もあるだろうが、スポーツに夢中で、そういう外面的な女らしさは感じさせないという面がある。

・家庭環境とジェンダー

感じるのは、女だから結婚して家庭に入るといった人生の選び方をしていない生徒が多いということ。これは高校からの印象なのだが、生徒のご両親が離婚されている家庭も多いことが関係していると思う。母子家庭で母親が働いている家庭だと、懇談の場でも、子どもに対して、経済的な力を持ってほしい、資格をとって働いてほしいという要望が母親から出る。母親自身は資格を持っていなくてパートで働いている、というケースもある。女性には資格がないと社会で生きていけないというような風潮もややあるように思われる。いわゆる良妻賢母に、と考えている家庭は少ない。

・生徒の言動で気になる点はあるか。女子校のため異性との関係は見えにくいと思われるが。

学校の環境として男子生徒がいないので、そういうことに配慮がもともとない。そこが男女共学の学校とは違う。ある意味鈍感になっているとも思う。

男性の目がないため、生徒の言動はある意味したい放題、自由。着替えるのでも、男性

教員がいても、わりとへっちゃらで、むしろ男性教員がなにか悪いことをしているような心理になる。ホームルーム中でも教室の後ろの方で着替えていたりして、「先生も男やで！」と注意するような状態である。

そして、女の子やからということではなく、教室では行儀が悪い。生徒の話だと、男の子の前ではわりとちゃんとするというが、とにかく教室では行儀が悪い。

・別学ということでの長所と短所

女子校なので、生徒会でも女子が長である。共学だとややもすると男子が長、副会長女子となるが、リーダーシップということではそれを学べるという点で別学のある意味メリットかと思う。最近、共学校で男子が元気がないと聞くので事情は異なっているようだが、どうしても男女共学になると、そこに男女の力関係が働くのではないかと。女子校で、何かにつけて自分たちでやっていく、というのはいいことだと思う。ただ、そこで、学校の中で男女のジェンダーを感じない部分、何で男はこうなの？と考える問題意識がうまく来にくい点は、デメリットかとも思う。

・生徒は、教師に対してどのように感じているか（相談相手、管理してくる大人等）

教務室にきていただいたら雰囲気はわかると思うが、生徒たちは教員に対して親しみを感じていると思う。やんちゃな子でも最終的には頼りにはしてくれていると思う。学校にそういう雰囲気はあると思う。

5) その他

・性教育や異性交遊についてについて

今の男の子とのつきあいというのが軽い、という印象を受けている。メールをやりとりして、それだけで彼氏彼女になってる、とあっていて、疎遠になったら別れた、という程度に思っている生徒もいる。

異性交遊に対する指導については、本校ではふみこんだ指導はしていない。生徒は、あまり隠さずオープンで、教員にも付き合っている話をする生徒はわりあいいる。

・教員への啓発・研修について

：生徒への教育だけでなく、人権意識を教員にどうつくるかということも課題ではないか

セクシュアル・ハラスメントについては留意するという意識は教員に浸透してきたが、生徒に対して、どう生きていくのかという話になると、現状としてはまだ、女らしさ・男らしさにこだわる先生も多い。「女子校だから、女の子は女の子らしくするべきだ」という指導をしている教諭はまだいる。

しかし、その点を研修で取り上げるのは難しいと感じる。世界の条約や日本の法律など

をとりあげ、世界の人権水準や国の施策を知ってもらって、共通理解をもってもらおうということからだと考えている。ジェンダーフリーの研究も何回か行ってきて、反発する教員もいるが、共通項を確認しながら進めていくことが必要だろう。

本学には、障害を持った生徒も、同和地区出身の生徒も、在日コリアンの生徒もいて、それぞれの立場の子のことがわかっていないと、生活指導上の問題も生じてくる。そうしたことを含めた生徒理解がないといけないと思うので、教員自身が人権意識をしっかりとっておいてほしいと思う。

(記録作成：中澤)

(2) B 私立中学校

0) 回答者

地歴科担当の女性教員。校務分掌で人権教育を担当している。

1) 学校概要

1917年に高等女学校として設立された高校に併設される、比較的歴史の古い私立の中堅女子校である。中学校は1学年あたり4クラスで、うち1クラスが特進クラス、3クラスが総合進学クラスとなっている。系列の幼稚園・中学校・高校・大学(短期大学部を含む)・大学院があり、中高一貫教育を行っている。

・教員の年齢・性別構成

平成17年度4月現在で、女性教員の占める割合は全教員のおよそ3割。非常勤には女性が多い。

・卒業後の進路

高校を卒業した生徒の進路はほとんどが大学・短大であるが、最近は専門学校も増えているとのこと。また、系列の女子大学・女子短大への内部進学は、かつては8割程度だったが、最近は3割程度になっている。就職する生徒は年に1～2人でほとんどいない。

2) ジェンダーに関わる教育実践(授業実践)の内容等

・人権教育の中での位置づけ

毎年、人権教育については各学期に1回、外部から講師を呼んで話を聞いたりビデオを観たりしている。その際、前後のLHRをつかって事前学習・事後学習をするようにしている。どの学年も1回はジェンダーや男女共同参画社会といったテーマを取り上げている。2005年度については、1年生では2学期に「豊かな人間関係を作るために」として私学人

研事務局の方に講演してもらった。2年生では3学期に「男女共同参画社会に向けて」として東大阪市の女性センター発行の「見えていますか、家庭の中の男女平等」というビデオを視聴、ディスカッションを行った。3年生は1学期に「女性の自立と人権」というテーマで、弁護士の方に来ていただいて話を聞き、ジェンダーアンケートをとるなどした。

・その他の取り組み

人権教育とは別に、総合進学コースでは週2時間全38時間の「進学講座」を行っている。その中で、平成17年度には、回答者と生物の教員が「女性の生と性」という講座を設けた。内容としては回答者が「ライフスタイルと経済学」「働く女性の法律」「離婚について」などの講義を行い、生物の教員が「性の商品化」「感染症」「DV」などをテーマとして講義をし、最後に生徒がそれを受けての発表を行った。

特別講座では、「あなたもお姫様になりたい?」というテーマを設定し、若桑みどりさんの本を参照して、ディズニーのアニメーション映画「眠れる森の美女」や「シンデレラ」をジェンダーの視点から見てみるという実践を行った。特別講座は110分授業に2回出席すると単位が出るというものである。昨年の参加生徒は4名だけだったが、今回は60名以上も受講した。

3) 通常の学校環境に対するジェンダー・バイアス解消の取り組み

スクール・セクハラ委員会が組織されている。

・教員の状況について

年に2回の教員研修の中に人権教育の研修会が入っている。公務分掌としては、高校の場合には、人権教育は、各学年に担任外で一人ずつ、部長等を合わせて5名が担当しているが、中学校には人権教育部はなく、特別活の中に入っている。

4) 生徒の現状について

生徒の家庭背景については、母親がパートをしている家庭が多く、また自営業の家庭も多い。多くの家庭が経済的には困っておらず、生徒の学力も中堅といったところ。

(記録作成：眞鍋)

(3) C 私立中学校

0) 回答者

公立学校に7年ほど勤務し、附属学校に14年で勤務、その後現在の学校に異動してきた男性教員。妻は元教師。息子・娘も教師をしている。

学生時代の恩師がよく正月に自宅に学生を招いてたこ焼きを焼いていた。その恩師は、河上肇『第二貧乏物語』を教え子に配っていた。その人の影響で教師を目指した。

自分の子が教師になったことで、「自分が死んでも自分の教育は生き続ける」と感慨深い。

1) 学校概要

幼稚園から高校まであり、小学校までは共学校。中・高校は女子のみの編成の中高一貫校。進学する上層部の子は中学から外部に出ることが多い。

幼稚園がスタートしてから 50 周年、創立でいうと 200 年の学校。今年から中高一貫になった。学校のモットーは「よき女性を育てる」こと。

ミッション系の中でも古いものを守るという傾向のある学校であり、よき女性・しつけ・言葉づかい・あいさつ・服装・身だしなみ・清掃・奉仕などの人材を育成したいというのがある。本校は、聖母貢献修道会系の学校で、この修道会はフランス革命時に寺子屋のような形でその機能を果たしていた。世界中で 11 カ国、日本では堺と姫路にある。

・生徒について

最近の生徒数は、中・高あわせて 400 名台（中学 120 名程度、高校 300 名程度）に減少している。学級編成は、中学校の場合各学年 2 クラスずつ。人数が少なくても 2 クラス編成なので、合同授業のものもある。

高校卒業後は進学が中心。進学する場合は、上智や聖心などのカソリック系指定校への進学が多い。文理コースでは、国公立大の一般入試にチャレンジする子もいる。全体的には、関関同立や外国語系、看護や福祉系学校への進学が多い。外国語系大学から留学する生徒もいる。なお、本校は、ロータリークラブの留学生を語圏から 1 名受け入れている。

・学校，教員について

卒業式以外の学校行事は中・高一緒に行われる。先生方は、中・高兼任で、専任は 35 名くらい、講師は 20 名くらい。職員室も一緒。教員の男女比は 6 : 4 で女性が少し多いくらいの比率である。

宗教色があるものとしては、学級朝礼、祈りを唱える日などだろうか。聖歌を歌ったり、マリア会（生徒のサークル）があったり、ミサも行われる。なお、信者の生徒は、6 学年で 10 人くらいだったと思う。

2) ジェンダーに関わる教育実践（授業実践）の内容等

人権教育については、例えば現在（2005 年度）の高 1 生徒 3 クラスにジェンダー意識についてのアンケートを取り、大阪の私学と本校との比較を行った。その結果は、研修会で

の資料とした。

学内では、週2回、7時間授業のあとに研修・話し合い・報告が設けられる。このうち、(上記のような)人権については年3回の時間がある。人権のみで年3回しか研修等の時間がないのは、ほかの研修や会議を含めると他にもすべきものが多く、忙しいため。なお、報告したことは、記録して職員会議で配るようになっている。

3) 通常の教育・学習活動におけるジェンダー・バイアス解消の取組み(授業以外)など

女の子の学校なので、女性の人権を重視する配慮を管理職も意識している。スクール・セクハラなど、女子に対する蔑視について、教員研修(人権教育研究委員会)で徹底している。例えば、女子校では教室での着替えがよくあるが、その時も「着替えたかー?」と声をかけてから入る。「子ども」だけども、そういうのは尊重しなければいけないと思っている。また、呼びつけについてもしないようになっている。

4) 生徒の現状について

進学先をみると、かつては文系・語学系中心だったが、最近は理系も多くなっており、理系の中でも薬学等が多くなってきた。

5) その他(2)とも重なってくるが)

毎年、私学人権の中のどこか1校が人権教育研究指定校になるのだが、今年(2005年度)は本学の高等部が指定校になった。人権のメンバーは各学年から教員1名ずつくらいの6名で、人権HRの時間に関連する取組みをする。

かつて、12月の人権週間に、HRをつかって“ハンディキャップ(全250分くらい)”を扱ったことがある。堺の社会福祉協議会にご協力を頂いた。

【実践例】車椅子体験，上肢障害体験，聴覚障害体験，視覚障害体験

人権HRは、中1～高3まで年1回は実施する。実施内容は、ジェンダーや国際理解などなど。例えば、遺伝子組み換え大豆や結婚、イラクへの出兵を題材にして高1の担任3名が生徒にディベートをさせた実践もある。

・回答者個人の思い・考え

人権部が「こういう内容をやって下さい」と言うのだけが人権の教育ではない。例えば、国語でアメリカの児童労働について取り上げるという実践もあったのだが、そのように、色んな教科で人権を踏まえながら実践していくということは各教師の中に位置づいていると思う。

学校にはボランティア同好会というものがあり、障害を持っている人たちへの見方が優しい子が多い。世の灯台、隣人愛、人の痛みや思いやりなどを大切にしている、そういう観点から、社会に貢献するよき女性の育成を重視している。

個人的には、自分で考え、自分で行動できる子の育成を目指している。保護者のニーズは「おとなしい子」のようだが、これからの子は、自分の意見を持っていないといけない。その子の役割が見つけられたら、と思っている。

(記録作成：木村)

(4) D私立中学校

0) 回答者

男性教員。生活指導から人権教育担当へ移動して担当。現在は再び生活指導部に戻っている。これまでの経験を通じて、生徒指導と人権教育とカウンセリングをつなぐ教育の必要性を感じている。

1) 学校概要

仏教系の中高一貫校であり、各学年 50 名程度で 2 クラスに分かれている。高校は 1 クラス 50 名程度で 6 クラス前後になる。校則は厳しくなっている。

・教員の構成

教員構成は、20～25 名で、うち女性教員は 4 名。教員によっては高校との兼務をしていることがある。女性教員の内訳は、国語 2 名、理科 1 名(同系列の別中学校とかけもち)、技術家庭 1 名の 4 名である。

2) ジェンダーに関わる教育実践(授業実践)の内容等

・人権教育の枠内で

人権は月に 1 度の LHR で行われているが、日々中で人権が問われることは少なかった。ジェンダーについては、高校 1 年生でとりあげることになっている。また、性教育についても行ってはいるが、生徒にとってはやや遠い未来のことであり、イメージできないようで、あまりうまくはいっていない。中学校のほうが、生徒の現実に合わせて人権教育の内容を作っていくようになっている。

3) 通常の学校環境に対するジェンダー・バイアス解消の取組み

小学校でのいじめから逃れるために、この中学校を選択する生徒もいることから、そういう生徒たちに「弱くてもよい」「泣いてもよい」というメッセージを送るようにしてい

る。また、暴力についても、子どもの暴力の問題の背景を探ることを重視している。先生と生徒の会話率は高いので、教師が生徒の話を職員室に持ち帰って、必要に応じて教育活動に入れている。

・教員の状況について

校務分掌としての人権教育部は、高校の教諭が部長、中学校の教諭が副部長となり、中高各学年1人ずつの担当を置いている。

4) 生徒の現状について

最近はけんかが時々起こったり、子どもの事故が長期的な蓄積を経て大事になってからでてくるようになってきた。一方で、「田舎ののんびりしたやさしい子」もあり、いじめを受けた経験などから、地元からのがれてくる子もいる。

(記録作成：眞鍋)

(5) E 私立中学校

0) 回答者

この学校では数少ない女性教員。

1) 学校概要

浄土宗の僧侶養成のために始まった、比較的歴史の古い仏教系の中高一貫校。生徒数は、中1が274名、中2が252名、中3が227名。入試のレベルは高い。

・教員の年齢・性別構成

教員の男女比は9:1で、専任の女性は2名のみ。

2) ジェンダーに関わる教育実践(授業実践)の内容等

2006年度については、人権HRにて「男女同権・性差別について考える」というテーマで一回(3年次の10月)に『翔太の明日』という視聴覚教材を用いて、社会が作った性別役割についての固定観念について考える機会をもった。人権教育の主なテーマは、現在は生徒の状況をみて、けんかに関するものが多くなっている。

3) 通常の学校環境に対するジェンダー・バイアス解消の取組み

それほど行われていないと感じる。

・教員の状況について

10年ほど前に、人権教育の推進校になっていた頃でも「母親の手弁当が基本」という先生が多く、教員自身がマッチョな文化の中にいると感じる。

4) 生徒の現状について

家庭背景としても、かなり現在の1年生は喧嘩が多くなっている。

(記録作成：眞鍋)

(6) F 私立中学校

0) 回答者

ご自身もこの学校の卒業生である男性教員。

ご自身の学生時代の頃の学校状況などと照らし合わせながら学校状況や教育実践状況などの変化や課題についてお話いただいた。

1) 学校概要

中高一貫校の男子校であり、進学校である。専任教員は60名。うち、女性教員は、英語2名、数学1名、養護教諭2名、図書館司書1名のみである。教員の男女比率は9:1。

非常勤を見ても女性教員は極めて少なく、その数は英語1名(外国人講師)と家庭科1名(高校担当教員)のみにとどまっている。それでも、この数年でやっと女性教員が入ってきた状況。それまではいわゆる“マッチョな”学校だった。なお、この学校では、中学・高校の分け隔てなく先生方が移動する。

生徒の状況については、高校進学時に外部から入学してくる学生は毎年30名ほど。進学校なので、かなりお金をかけている家庭が多い。

2) ジェンダーに関わる教育実践(授業実践)の内容等

週1で「倫理」があり、教員免許をもった神父が人間形成の面で、社会でどのように生きていくかを話す時間がある。教え込むというよりも、生徒に人権について考えてもらうようにしている。

校内には人権教育担当が25名いて、これは専任の約半数、各学年から少なくとも1名は担当するようになっている。新人は必ず人権教育担当をすることになっている。

性教育については、家庭科の時間でかなりの時間を割いてやっている。

3) 通常の学校環境に対するジェンダー・バイアス解消の取組み

人権教育関係の体験等は、授業の枠外で行っている。

・教員の状況について

人権教育担当の先生方であっても、ジェンダー的な問題へのかかわり方が分からないという人もいる。また、教員のジェンダーに関する問題としては、生徒に対して「こういう男になってほしい」という言い方をするものもある。

ジェンダーに関する生徒の状況としては、同性愛の学生も一定数いることは確か。また、知らず知らずのうちにマッチョになっている生徒が多く、「女の子を守らないといけない」という考え方になぜかなって行く。個人的にも、ここが本当に課題だと思っている。

4) 生徒の現状について

中学校の入学者 180～190 名の中で、150 名は運動系のクラブに入る。

冷静で頭がよく、偏りがいない子がリーダーになりやすい。バランスが取れている子が学級の役員に選ばれていくことが多い。一方、おとなしくて意思表示がはっきりしない子や、ところどころで皮肉っぽいことを人に言ってしまうような子がいじめの対象になることが多い。

人権教育に関しては、生徒会でも、差別に関する問題をテーマに、「人権週間」と名づけて発表を行ったり募金を集めたりしている。生徒は素直に話を聞くことが多いので、人権週間の発表も関心を示して素直に聞く生徒が多い。

なお、家庭からの学校に対するクレームは少ない。

(記録作成：木村)

(7) G 公立高等学校

当該高校訪問のきっかけは、ヒアリングに協力くださった Y 先生らの取り組んだ「グローバル・スタディーズ」という授業について情報を得たことである。『解放教育』2005 年 2 月号「自分さがしと進路指導のコラボレーション」や、『キャリア・ガイダンス』2005 年 11 月号などに紹介されている。

0) 回答者

Y 教員：G 高校には 95 年着任。20 年以上、高校での人権教育に携わり、グローバル・スタディーズに取りくんだ男性教諭。教科は社会科。

ヒアリングに際しては、Y 教員のほかに、当該年度の人権教育委員である N 教員と、グローバル・スタディーズを担当する T 教員も同席していただき、生徒の状況や 2 年次のグ

ローバル・スタディーズの授業内容等について説明していただいた。

1) 学校の概要

共学の公立高校である。普通科総合選択制が3年前からスタートしており、3年次には選択教科から自分の興味関心に即して学習するようになっている。現在では、40人の6クラス募集である。教員数は、非常勤講師を入れて50名程度である。

毎年240人が入学して、約200名が卒業する（残りは中退）という状況である。卒業後の進路は、今年度については学校紹介の就職が65名程度であった。クラスの風景としては、朝、出席をとりに教室に入って、10人くらいが遅刻してきてまだいない、というようなこともある。これに象徴されるように、勉強には気が向かず、家庭環境の不安定な生徒が多い。

2) 授業「グローバル・スタディーズ」の概要まとめ（解放教育論文より）

まず上記「解放教育」の論文をもとに、当該授業実践の内容について整理しておく。

「グローバル・スタディーズ」という授業は、H高校において進路指導とのコラボレーションを企図しつつ取り組まれている人権学習である。

グローバル・スタディーズは、当初学校設定科目である「産業社会と人間」としてスタートした後、2003年度からは「総合的な学習の時間」として実施されている。当初は1学年時の2単位のみでの授業だったものが、現在では3学年で実施され各学年1単位、計3単位の授業となっている。趣旨は、「自分と社会との関係をグローバルに見つめ、自身の進路を切り拓く」ための学習の時間というものである。

Y先生によれば、長く人権教育に携わってきたが、「差別の厳しさ」を伝えて考えさせるというこれまでの人権HR（ホームルームでの人権学習）に限界を感じていた。そして人権教育には、自尊感情、授業形態、教科の学習と人権学習の関係という3点の大きな課題があるという。

その課題とされる内容を下記にまとめておこう。まず、自尊感情の問題について。それまでの生活のなかで家庭と学校それぞれにおいて、個人として尊重されてきていない子どもは、十分に自尊感情を育てられていない。依然として高校間の格差が大きい日本社会で、学力に課題を持つ生徒が多く入学する高校においてはとくに、厳しい家庭環境のなかで育ってきた生徒が多い。そういう子どもにとって、「差別をしてはいけない」というメッセージは他人事でしかなく、自らの生活や生き方を問い直す契機にはならない。

次に、授業形態という点について。講義形式の授業が主流の現在の高校には、教師 - 生徒間のみならず、生徒間にも、社会や個人の抱えるさまざまな問題を率直に話し合える豊かなコミュニケーションが欠落している。そういう環境のなかでは、人権HRのときだけ、「とても大切な問題だから率直に話し合おう」といってもできない。教員についても同様

のことが言える。日常の生徒指導において、生徒を尊重する姿勢と態度が常に問われており、生徒との信頼関係のないところにはいかなる指導も意味をなさない。

最後に教科学習との関係について。人権学習が教科の学習と切り離されており、特別なものでしかないことが課題である。教科学習と切り離されているために、大学進学を目指す生徒が多い高校では人権 HR すら実施できないところがある。

こうした課題認識に基づいて取り組まれたのが、グローバル・スタディーズである。すなわち、自己肯定感の育成を柱とする人権教育のプログラムを、特設の HR ではなく、授業として位置づけて実施する。手法として、生徒間双方のやりとり・気づきを重視し、教師はファシリテーターの役割を担う、というものである。

当该校では、日頃、ややもすると冗談交じりで傷つけ合うことが生徒のコミュニケーションとなっているなかで、こうした授業でふりかえりと気づきを大切にすることは、生徒の安心と自信を引き出す力となっている、という。

論文中には、次のような生徒の感想が紹介されている。

「こんな授業初めてで楽しかった。人に言えない思いや言葉がふつうに書けてよかった。んでもって驚いた。はじめて自分ってこんなんやったっけって思った。今まで隠していた『自分』を出して自分を好きになりたい。」

具体的なテーマと授業内容はおおよそ次のような視点で組まれている。まず、一年次には、人間関係とトラブルを起こしがちな昨今の生徒の実態をふまえて、人間関係を考えるテーマを設定している。その後、自分さがしから始め、他者との関係を考え、次に社会に目を向けていく。将来に目を向けていくためのテーマ設定としては、ビデオ教材を利用して好きなことに懸命に取り組んでいる人たちと「出会い」、その後、夢から現実への視点を向けていくように方向づけられている（図表 -2-1、図表 -2-2 参照）。

本授業の課題としては、誰が担当するか、という問題がある。グローバル・スタディーズはやりがいがある一方で、やはり心構えが必要であり、意欲をもって取り組む教員が担当すべきであるが、必ずしもそれは十分ではないという点である。

【図表 -2-1】グローバル・スタディーズの目標・ねらい（2006 年度実施計画書より）

グローバル・スタディーズの目標・ねらい(3年間)	
	ありのままの自分を受け入れ、その上で他者を理解し尊重する態度を育む。
	さまざまな人間の具体的な生き方を通して、これまでの自分を見つめ直し、今後の自分の姿を構築してゆく力を身につけさせる。
	多角的な教材を通して、個々人固有の問題を意識化し、それを解決するための方法・考え方・技能などを育成する。

【図表 -2-2】グローバル・スタディーズの学習テーマ一覧(2006年度実施計画書より)

	1年テーマ	2年テーマ	3年テーマ
1学期前半	文字から広がる世界を知ろう	わたし、あなた、そしてみんな	情報集めて進路決定!
1学期後半			進路への不安と期待
2学期前半	「自分さがし」から始めよう	自分さがし仕事さがし	働くための知識を学ぶ
2学期後半		パートナーシップについて考えよう	楽しく働く方法を考えよう
3学期	「夢に向かって」-仕事発見-	「夢に向かって」-資格・試験-	3年間の総まとめ

3) ヒアリングより：ジェンダーに関わる教育実践(授業実践)の内容

当該校においては、かならずしも、ジェンダーに特化した授業実践を行っていない。ここでは、グローバルスタディーズという特徴のある人権学習の授業実践をとりあげる。

・テーマ、授業時数、方法、担当者(教員体制)等

この授業は、1998年に、3人の教員で1年生8クラスだけで開始したものである。当初は、新しい授業をしようということで、「この指止まれ」の形で、有志で委員会をつくり、その有志のなかから、誰が実際に授業するかを話し合っ、1年生を対象に3人の教員が授業を行った。

グローバル・スタディーズ(以下、GS)は、この当時「産業社会と人間」という学校設定科目に位置づけられた。その科目を設けるにあたっては、そのほかの教科の時間を2時間削って代わりに入れることになるので、職員会議ではかなり議論となった。それには先行して実践していた他の高校の実践例を参考にした。そこでは、「社会の扉」という名称で、自分と社会との関係を考えさせ、どういう人間となって社会に出て行くのかを考えさせる授業を行っていた。

その後、2003年度より進路との関わりをふまえて全学年で実施することとなった。同時に、有志による委員会ではなく、学年毎に委員を選出してGS委員会を組織した。それは、当初関わっていた教員が、異動で入れ替わったことも一つの理由である。担当者はその委員の中から学年ごとに選出する形になった。

経過をさらにさかのぼると、私の担当は社会科で、95年に赴任して最初の頃、現代社会の授業を担当していたが、人権について中途半端ではなくきちんとやりたいという思いがあった。それで、もう一人の担当の教員と相談して、1年間現代社会を人権をテーマに授業することにした。年間5回定期考査があるので、5つにテーマを区切って、部落差別、在日韓国・朝鮮問題、ジェンダー、障害者問題、家族問題を扱った。

これらのテーマに沿って、いろいろな教材を探してきて、一時間毎に、映画やドラマを見たら感想を書かせたり、詩を読んだら感想を書かせたりして、次の時間にその感想をプリントにまとめ、紹介しながらふりかえり、そのようにやりとりをしながら授業をつくった。翌年は、私はその教科を離れたが、担当した教員がそうした授業を引き継いでくれたので2年間の実績となった。

その結果、生徒がしっかりと「くいついて」きた。生徒にとって、考える場として有効で、いろいろな大事なことを考える機会になった、というふうに私たちはその授業を評価した。この授業実践が、GSの一つの布石となった。

もう一つの要因として、中退する生徒が非常に多いということがあった。当時は280人が入学して、卒業時には、二百二、三十人に減っているという状況だった。つまり、二クラス分の生徒が、卒業までの三年間の間に辞めていっていた。それをなんとかしなくては、という問題意識から、今までのように知識を教えるという授業だけではだめだろうということになった。もちろん、いろいろな方法が考えられるのだろうけれども、やる気を失って無気力になっている生徒たちを元気づける、気持ちをサポートする授業をしていこう、と。それが人権で一番大切なことではないかと視点を変えていった。かつては、人権学習というと反差別の立場、部落差別にどういう立場をとるのかを問うような形の授業を行っていたが、それ以前に、生徒たちは自分自身を大切な存在と思えていないということが浮き彫りになり、生徒一人一人の自尊感情を育て、「自分はそこにいていいんだ」ということを伝え、どのように他の人と信頼関係を結び、また社会に出てどういう形で自分の役割を果たすのか、ということが人権の基本だと、とらえ直していった。そういう考えのもとに実践しているのがこのGSである。

・生徒の反応

GSの授業に取り組んで1年経ったときに、生徒から「2年生ではもうGSないの？せっかく自分のこと真剣に考えられたのに」と言われた。1年の最後の授業で、夢に向かって、どう生きていくか、自分はこうなりたいとかこんなふうにかんばりたい、というふうなことを考えるのだが、2年以降はこの授業がないので、だんだん感覚が薄れていく。それで、3年生になって、従来通り進路指導をしても、自分の進路のことなのにリアリティがなくなっているし、夢やふくらんだ気持ちがしぼんでしまっている。これではダメだ、ということになった。そうして、1年次のみではなく3学年全学年にわたる取り組みへと発展し

ていった。

・授業について / 成果と課題

現在では、たとえば部落差別について正面から扱うというよりも、識字についてとりあげ、そのなかで部落問題にも考えさせるようにしている。プログラムは一年生から順番につくってあるが、最初のテーマとして識字を取り上げている。まず、文字から広がる世界を知ろう、と。文字を知らないことがどんなにたいへんなことなのか、とか、識字学級があって今も頑張っている大人がいるよ、それは単につらいことではなく、生き生きと学んでいるんだよ、いろんな面があるよ、とそういうことを伝えている。同和地区の識字学級とのパイプがあるので、実際に識字学級で学んでいる人に来てもらったり、聞き取りをしたりしながら、学んでいくが、そのなかで部落問題についても気づいていくようになる。生徒は資料を読んだり、実際の様子に触れたりすることで、「あ、勉強は大事なんや。中学校からずっと勉強サボってたけど、やってみようかな」というような気持ちになる。学習意欲を引き出す役割がある。

もちろん生徒のなかには同和地区終身の生徒もいるし、隠れたところで障害を持っている生徒もいるので、そういう当事者の生徒については向きあってほしいと思うのだけれど、残念ながらそこまではフォローし切れていないのが現状だ。また、反差別という視点についても、どういうふうに深めていくか、ということは課題である。

・ジェンダーについて

ジェンダーということでは、テレビのドキュメンタリー番組のビデオを使って仕事の紹介をするが、そのなかの車関係のビデオを見せたときに、若い女性がトラックの運転手であったり、板金、車のマフラーを作っていたり、生き生き仕事をしていた。そういうモノを見せると、生徒は、男も女も、「おお、格好いい!」というような反応をする。そういう、さりげなく、ふだん気がつかなかったジェンダー・バイアスに気づく、という形が理想かなと思っている。このことに直接授業で踏み込んではいないが、きっかけになっているかなという気がしている。他にも同様な例がある。

・性教育（恋愛におけるコミュニケーション授業）実践

グローバル・スタディーズでは、学年毎にあらかじめあまり細かく内容を決めているわけではなく、学年毎に、昨年度の内容を参考にしながら各自生徒の状況も含めて授業を考えていく。そのなかで、T先生が性教育（あるいは恋愛におけるコミュニケーション）の授業実践をしたということで、T先生にも同席いただく。

この学校の生徒の状況をみていると、とくに人間関係をつくるのがなかなか難しいところがあって、そこで、2年で一学期間コミュニケーションについて取り上げていて、その

延長で恋愛にいける人間関係を取りあげた。異性との交際について悩んでいたりということもあるので。それで参考にしたのは、他の高校で生徒たちが作った冊子で、そのなかのロールプレイについてとりあげた。

交際している男の子と女の子がいて、男の子は「そろそろエッチしたい」、女の子はそういうことをまだ考えていなくて、誕生日に男の子に迫らえて「ええー」と困るという場面で終わっている。それに対して、「自分ならどうするか」ということを考えさせて、書かせ、それを生徒に返していった。そうすると、お互いの意見に興味津々といったふうで集中して感想を読み、次第に生徒からいろいろな反応が出てきて、生徒がぼそっといった発言を拾い上げて、こちらから返したりというキャッチボールのできる授業となった。

あまり結論めいたまとめはせず、生徒からいろいろな意見が出るに任せたとような授業だったが、一年の授業のなかではとりわけ印象に残っていて、私自身もおもしろかった。

(授業のまとめについては) 私個人の意見と前置きをした上で、我慢できるのだったら今は我慢した方がいいと思う、と話した。そうじゃないなら、考えないといけないこと、として、避妊や性感染症など、保健的な授業になってしまったが。反省点としては、男女に限らず、恋愛における人間関係の取り方ということで、生徒の意見をもっとすくいあげながらまとめられたらよかったと思っている。この学校では、性経験のある生徒たちは多いと思うので、そういうテーマをきちんととりあげなくては！という思いのほうで先立ってしまった。ただ、私個人の意見として話した内容については、生徒はとても集中して聞いてくれていた。生徒の反応はとてもよかったと思う。その授業が終わってから、生徒から、より多く相談を受けるようになった。

・進路指導との連携

GSの授業と進路指導を連動させていこう、という問題意識で進めている。私としてはGSを始めた当初から問題意識はあったが、オープンに議論を始めたのは2年前くらい。

例えば2年生の後半から職業に関わる内容を扱って、このタイミングでは職業紹介をしていく必要があるか、など検討している。ただし、世の中にはたくさん仕事はあっても、この学校に来る求人は現実的には200枚、300枚なので、その辺の微妙なバランスを考えないといけない。

その中で、男性や女性というジェンダーも意識しながら考えていきたいと思っているところ。むしろアドバイスをもらいたい。

・学校全体のなかでのGS

私たちGS担当がしているのは、生徒の書いた感想を教員に配って、生徒への理解を深めてもらうことである。GSでは、毎回必ず生徒に感想を書かせて、次の時間にそれを生徒に返して、授業の導入にしているのをういている。

そのことに対する教員の反応としては、概して好意的に受けとめられているが、一方で生徒を甘やかしているだけではないかという批判もある。

私は担任を持っていないが、GSの授業では、生徒の気持ちがよく見えてくる。担任よりもわかってしまう部分もある。だからこそ、連携が大切となってくる。

・保護者に対して

保護者に対しては、保護者宛の人権啓発通信が年3回発行されるが、そのなかにGSの内容や行事の紹介をしている。進路指導のほうでは、進路便りで保護者向けに編集したりなどしている。

4) 通常の教育・学習活動におけるジェンダー・バイアス解消の取り組み、あるいは学校環境整備としての取り組み(授業以外で)

・人権教育委員会について

上記GSについて検討する以外に、職員に対する人権研修を行っている。この委員会のなかに、ジェンダーに関する担当、というものがあるわけではない。

職員研修としては、教員自身が自信をなくしている、あまりの忙しさに悲鳴を上げているような現状があり、最近の研修では、問題が何かということ共有するための研修とか、カウンセリングについての研修を行った。その他には、生徒の情報交換のための研修も行った。

ふだんの日常の生徒の生活指導のちょっとした場面でも生徒は傷ついていっている。しかし、教員の側でもせいっぱい生徒に向きあおうとして、生徒に通じていないような場合もある。とても難しいと思う。

・混合名簿

2年前から、やっと名簿が混合名簿になった。混合名簿を導入しても何も問題ないのに、と思っても反対があって、強引にはしなかったのでとても時間がかかった。こういう問題に対応するのも人権教育委員会である。

・教師のジェンダー・バイアスについて

この学校で目にすることはほとんどないと思う。この学校は、人権教育を柱にした学校だということが、十年以上の実績として他に知られているので、それほど私たち人権教育関わる集団が強固なわけではないが、いい意味でも悪い意味でも、異動してくる教員にはプレッシャーがあるのではないかと思う。

5) 生徒の現状について

(N) (聞き取りをしたN教員の) クラスを例にとると、性別構成は、35人中、男子生徒が12-13人くらいと、女子生徒のが約3分の2を占める。どちらかという、「派手な」女子生徒が多く、男子が何か一言言ったら、女子がその倍言い返して、男子がシュンとなるようなクラスだった。

就職状況としては、まじめで、こつこつやる生徒が就職できず、就職希望の生徒のなかで就職できたそのタイプの生徒はクラスで1人だった。何かやりたいけれども希望のものがなくて、現実と理想のギャップがうまらなくて無理、という状況だった。そのため、女子生徒は、「もう結婚するからいいねん」とあきらめてしまうような状況だった。

卒業して1, 2年ですぐ結婚して子どもをもうける卒業生もいる。

(T) ジェンダーということで言うと、どの授業でも、場の雰囲気は完全に女子がリードしている。女子が数の上で多いというのは圧力にはなっていると思うが、それだけではない。意見を言ったり、書かせたりしたときに、いろいろ考えているな、たくさん書いているな、と感じられるのは女子。場を仕切るのも女子。進路や将来に向けてという点でも女子が積極的。私自身は、単純に「好きな人見つけて結婚したらいいねん」とは思っていないように思う。現実が、男性が一人で家族を養えるような状況でもないし、やっぱり自分も働かなくてはいけない、という意識はあると思う。

・生徒と教師の関係について、生徒は教師に対してどのように感じているか

教員がどのようにみなされているかという、例えば生徒が妊娠してしまったというような困ったときに、相談相手になれるような担任というのは、生徒の目から見るとあまりいないと思う。生徒と話ができる、生徒が相談してくるような関係をつくれている教員は、生徒から見て学年に数人いるかどうか、というくらいだと思う。もっと多くいないといけないと思うのだが。

例えば勉強のできる進学校だと、生徒が自立しているというか、自分で判断して、相談事がいちいち教師にはない、という傾向がある。この学校では、生活面でも人間関係でも、生徒にはいろいろとトラブルがあるので、教員のあり方としては、しっかり生徒の相談役になれるということが理想である。

ただ、教員も高齢化していて、30代の教員がいない。ここ1, 2年で20代の教員が入ってきたけれども、やはり教員の年齢も影響している。教員の思いとは別に、口うるさく注意されてうざったいと感じ、生徒のほうで距離を置いてしまうということもある。そういう状況で相談事だけはしにくる、というふうにはならない。

これに対して、学校としては、懇談・面談期間を設けて、二者面談や、保護者を交えて

の三者面談を行い、担任が生徒を理解しようとしているという姿勢を生徒に示すようにしている。

(記録作成：中澤)

(8) H私立高校

0) 回答者

今春で勤務していた女子高校を退職した女性教員。学校薬剤師として勤務している。半専従で4月から大阪私学人権教育研究会の指導員になる。また、専門学校で「公衆衛生」を教えている。

学内では人権教育委員長を8年担当してきた。当初は部落問題をやっていたが、生徒に対しては広く浅く様々な課題を扱うようにした。

・回答者のジェンダーに関する関心の背景

もともとジェンダーに関心があった。女の子に悲しい思いをさせたくない。女子高では、生徒からいろいろな相談を受けてきた。

(生き立ちとして)母が芸者をしていて、男にだまされたりする姿を見ていて、「女て損やな」と感じていた。大学も、商船大学校に行こうとしたが、その当時は男子のみだった。そういうことも、不条理だと感じていた。

・家族について

高校生の娘がいてGID気味。小学校のとき「男子トイレに入るのを注意してくれ」と、学校の担任から言われたこともある。

1) 学校概要

1学年200名ほどで、全学年で現在は700名未満。偏差値でいうと41~42程度。生徒の進路状況は、良くて私大進学。就職は、今年の卒業生で6名。この頃は、手に職をつけようという志向が強く、専門学校への進学が増えている。

専任は常勤講師を含めて48人くらいであり、男性の方が多く、年々女性の先生を雇わない方向に向かっている。教員の男女比率は6:4。理科は男性教員のみになっている。

2) ジェンダーに関わる教育実践(授業実践)の内容等

年間3回の人権HRがある。2003年度は、デートレイプの話をした。1年生には「あっていい違い、思い違い」を扱いディベートをさせた。

人権HRで扱う枠組については、各学年から1名ずつ委員を出して決めていく。実践する

のは担任。なお、人権教育委員は、ファシリテーターのような仕事。色々な生き方があるという話を含めながら、環境教育を行ったりしている。

・ジェンダー問題を学校で取り組むようになったきっかけ

スクール・セクハラの問題がジェンダー問題を学校で取り組もうと思ったきっかけ。女性が悲しい目にあうのは許せないという気持ちはずっとあった。

3) 通常の教育・学習活動におけるジェンダー・バイアス解消の取組み(授業以外)など

・大阪私学人権教育委員会 指導員としての教育実践について

「性差別問題研究委員会」が、大阪私学人研の中にある。自主活動の研究会で、性差別問題研究会の他には障害者、在日韓国・朝鮮人教育、進路、人権・同和問題、生徒自主活動、読本『にんげん』という研究会がある。性差別問題研究会の去年のメンバーは7名だった。

実際に女子校・男子校で指導員として行ってきた実践

- ・性の被害者にならないために(女子校)
- ・性の加害者にならないために(男子校)

なお、最近では、性同一性障害や性的マイノリティへの対応について、教師向けの講演をすることが増えた。

4) 生徒の現状について

・実践に対する生徒の反応

長く継続してやっている子どもたちも変わってくる。その変化は、生徒自身が自分で気づくほど。可能性があると思う。これまでを振り返ると、男子校で性教育をやると男子が恥ずかしがり、一方、女子校では質問がたくさん出る傾向があった。

5) その他

・ジェンダー・バイアス解消の取組みや近年進む男女共学化等々に関する回答者の考え

理念のない安易な共学化は大変なことになる。女子校に男子を入れて共学化し、男子が多くなると荒れてしまうことがなぜが多い。男子校に女子を入れた場合は女子が少なくても元気がいい。個人としては、中学校以前のジェンダー平等教育が重要だと考えている。男子校のメリットは勉強くらいだけではないか。

(生徒内のリーダー選出について) 日常のかかわりで注意しているのは、委員を全員にさせること。「イヤヤ」というのはなし。必ず何らかの委員を選ばせる。自分で意見が言

えない子には「こんなのどう？」とさりげなく働きかけている。

生徒には多様な人と会わせたい。ジェンダーの視点で大切にしているのは、多様な生き方を知らせ、多様な選択肢があることを知らせること。また、参加型の授業も取り入れるようにしている。

保護者に対しては、開かれた学校にする、これが重要。教師集団を動かそうと思ったら、保護者を味方につけることが必要。現在の学校の保護者をみると働いている母親が多く、学校での子どもの様子を親御さんが把握するよい機会として保護者会に呼ばれることがある。その際に生徒や学校の様子等を伝え、保護者側から「知らなかった～」という反応もあったりする。こうしたやりとりが信頼関係をつくっていくので、とても大事だと思う。

(記録作成：木村)

(9) I 小学校

0) 回答者：I 先生

I 小学校に 2005 年度春に異動してきて、6 年生を担当した 30 代の女性教員。卒業式を終えた春休みにヒアリングを実施。ジェンダーと多様な性に関わる教育実践に熱心に取り組んでいる教員として、人づてに紹介され、ヒアリングを依頼した。

勤務する学校はここが 3 校目です。初任は、全校児童が 40 名程度の極小規模の学校で、次が 1000 人規模の大きな小学校で 8 年勤めました。3 校目のここがもっとも一般的な規模の学校ということになりますね。前任校では人権同和教育に熱心に取り組んでいたのも、ジェンダーに関する実践についても理解が得られやすかったんですが、少し離れただけでこれほど学校環境がちがうのかと驚いています。

1) 学校概要

児童数 420 名程度の公立小学校。

2) ジェンダーに関わる教育実践の内容

・「多様な性」の授業実践について

多様な性のことを大事にするということでもいつも言っているのは、授業の中できちっと教えるということ。例えば性器の形は人によってぜんぜん違うよ、て。顔も違う、手の形も違う、つめも違う、そういうのと一緒に性器の形も人によって違うということもきちっといっておかなあかんと考えています。

たぶん、子どもの中で、多様な性って、意識されていないですよ。男らしさ、女らしさの方が（目に見える）。だけど多様な性の話って、一年に一回、2回は必ず出てくるんですよ。男の子のことを「おかま」といってふざける子が出てくるんですよ。（前は）そのときは流してただけやったけど、（今は）必ずくいつきますね。ふだんの関わりの中で、男の子が、女の子みたいな返事の仕方をしてわははーと笑うとかね、あるのね、しょっちゅう。

・研究授業：総合的な学習の時間「トイレについて調べよう」全10時間

授業意図：多様な性を知ること、性をわけることの理不尽さに気づく

成果：児童が自分の調べたことについて生き生きと意見を言えたこと。

一部の児童だが、男女を分けるのがばかばかしいと思えてきた児童がいること
いろいろな面で一人一人ちがって当たり前という認識が自動に浸透したこと

課題：研究授業を参観した教員への、多様な性を視野に入れた指導のあり方の徹底

トイレ調べの目的は、誰でも使えるトイレというのがありますよね、私はすごい利用しやすいのですわ。私が入ったら、「えー！」とかいわれたりすることもあるので。それを誰が使うのかといったら、子どもつれて一緒に入りたいときとか、おしめ替えたいときとか、いろいろあるやんかという話にもってって、性同一性障害者がこういうトイレを使いたいということを意図していたのですが、予想していなかった展開がありました。

授業では、子どもたちが町の中の店に行って、トイレを調べるんですが、男性用のトイレにオシメ替え用のベッドがあるって女の子は知らないですよ？男性トイレに行かないから。男の子に聞いて、「ええっ？」ていうのがあって。どここの店にはあったけどどここの店にはない、とか、ここにはこういう形の（個室に座らせる形のから、ベッドからいろいろありますよね）とか、自分が調べてきたもんやから、一生懸命説明するんですよ。

女の子のトイレに（そういうおしめ替え用の設備が）あるって先に出たんですよ。ほーかほーかと聞いていて、で、なんであるんやと思うー？ていちいち返しとったら、「お母さんが」「お母さんが」「お母さんが」て言うわけ。ほんなら男のほうからも出てきたのね、で、「なんである？」て聞いたら、（反応が）とまるわけね。なんでとまっとんやていっていったら「お父さんが」「お父さんが」「お父さんが」と。そうか、お父さんとお母さんがするんだねーていったら、ちょっと待ってくださいっていうのが出てきて、僕は親戚のお姉さんに連れられておしっこをしたことがあるとか、女子用トイレに、小さい男の子用の小便器があるという話もでてきて、お母さんとは限りませんとか、親戚のおねえちゃんとかおじいちゃんということもあるやないかとか出てきて、そうやな、お父さんとかお母さんに限

らんなあと。それはぜんぜんこっちが予想してなかったことで、そういうのがたくさん出てきて、それは結構よかったかなと。

で、女性用トイレの個室に音楽が流れるというのを男の子は知らなくて。最近、男性用トイレの個室にもついているんですって。流れる音とかあるんですけど。それがリーンリーンとかいう虫の声なんやって。で、それを聞いた男の子が「え、カサカサカサて音がすんの？」とか「ブーンとかっていう音がすんの？」とか質問して。でちゃんと何のためにあるとか説明せいとすると、女の子は「それは音を隠すためです」とか言うわけ。男の子は、音を隠すというとおならの音だと思って「え？ぶりぶりとかいう音を隠すの？」とかいうけど、女の子は恥ずかしがって言わないんです。そこに、ここで私がいわなあかんと考えた、エース級に勉強ができるえい子がおるんですわ。で「何の音を隠すの？」という男の子の質問に、「女の人が隠したい音は、生理用のナプキンをはがす音です！」「いやー、ちがうやろー。おしっこやろー。」てね。子どもの認識ってそういう感じでね。

・コミュニケーションの授業

授業案や実践方法については、教員の研究サークルでいろいろ考えてるんです。多様な性、多様な性できたけど、ちょっと一般受けしにくいな、って言って、これもいけて、こっちもいけるといいうえいやつ考えようやっていって。

今年度の取り組みとしては、今年度、研究協議会は 20 人くらいいるんですけど、低学年部 1, 2, 3 年生、あと高学年・中学校部という 2 つに分けたんです。低学年部はいたい何をしていこうと話したときに、誰でもこれをみたらすぐ授業ができるっていう指導案をつくらうという話になって。そんなときに何をしたらいいかっていうときに、低学年の間は多様な性とか、男らしさ女らしさうんぬんより、多様な生き方を受け入れる、コミュニケーション能力を高める、これやと。ジェンダーをくずしていくには一番はこれやと。今年はコミュニケーション能力の育成をおいてやろうとって設定してやったのがこれ（後述する授業実践）です。で、高学年・中学校部は、すぐに使える性教育の指導案をつくらうとしています。

で、会員の中では、一年に一回は必ず研究授業をやっていこうということになっていて、あるメンバーが実践したのがこれです。その授業は、マス目をいっぱいしきってあって、笑っている絵とか怒ってる絵とか泣いてる絵とか、いろんな顔が描いてある資料を使うんです。それでそういう、イラストの顔を見て、「いつも 70 点だったテストで 100 点とったときの顔はどれやー」とかいうたら、子どもがこれこれこれーとか。誰々さん、2 番です、誰々さんは 5 番ですーて、みんな（感情や受け取り方が）違うってことをわからすっていう授業なんです。

で、やってみて「どう？」て聞いたら、みんな違うーって言うんですね。この実践者は 1 年生で授業をやってやって、吹き出しつけて、台詞をいれてみさせて。そしたら生徒は

いろいろ言うわけ。そのなかで、うまいこと考えたねって言ったのは、「頑張って走ったらかけっこで2位だった」というのが結構微妙な設定で、意見がわかれてね。最後はみんな違うねっていう話になりました。これは、もともとは大阪の人権教育研究会かなんかの資料から引っ張ってきたんです。

それを私は高学年でやってみたんです。うちのクラスで。おんなじことやってみたんです。顔書いたプリントを拡大したシートを貼って。

で、女の子で2人、いつもくっついて、おしゃれで爪塗って、みたいなのがいるんですけど、その子と意見がわかれてしまったんですよ。それは当たり前なんだけど。感想を見たら、誰々と違うのがあってびっくりしたって書いてあった。当たり前なんだけど、わからない。子どもらは。そんなこともわからない。

で、みんな違うんだってことわかったって。いちいち、みんなそんなコメント。ああ、こんなん、もっとしていかなあかんのやって。こんなんで、どうやったらジェンダーって言えるんやー、て自分らがんがん（批判的な意見を）言ってたんやけど。やっぱりいいなと、基礎になるな、と思いましたね。

他者をうけいれるというところか、こう思っているのはこうだからだよって説明しないといけないとか、なんであんたこんなん選んだん？て聞いたら思いがあるのね。たとえばね、運動会で踊っていたダンスをほめられた、というのがあったときに、これって、下を向いた絵を選んだ子がいてね、みなやったーとかいう絵を選んでいるのにね、で聞いたらね「どうせ、お世辞でしょ」っていう子がおって、そういうふうに構えてる子なんやけど、「なんでそんなに思うの？素直にほめてもらったんやと思うよ」とかというような声を聞いて変わっていくっていうか。でも、「そういうふうに思うときもあるよね。自分もあるわー」て自分もフォロー入れるんやけど、そういう手応えはありましたね。これは結構いいなど。どうやった？て聞いたら、「今日の授業はすっきりした」という子が27人中5人もおって。それを言っているんだって。楽しかったは結構多かったんですが、すっきりした、が5人いましたね。

・新聞のコラージュの授業（参観日）

保護者への啓発も兼ねて、最後の参観日に、これは一発と思って、新聞のコラージュの授業をしました。もともとは、ほかのところでの実践授業だったんですが、それにジェンダーの視点を入れて、自分のクラスでやってみたんです。親にもグループ作ってもらってやって。

内容は、スポーツ新聞から「セクシーショット」を選んで、一つの作品を作り、生徒たちが素材の新聞から同じように作品を作る、というものです。ルールは、

1 はさみとのり以外は使用しない。

2 見本のコラージュは何度見に来てもいいが、一度に2人まで

3 来るときはしゃべってはいけない。話し合いはしゃべってもいいが。

という、そんなだけのルールなんです。で、同じように新聞を探して、つくっていく。

よくある手法やと思うんですけど、どう？て感想を聞いたら、振り返りのワークシートの書き方がわからなくて。作品をつくる時に中心になって作業したのは誰ですか？ていうと、わからんと。子どもらは目立つのがいやなんです。みんな、てかくの。絶対誰かききってるやつがおるのに。励ましてくれたのは誰か、とかいうのにも、個人名が書けない。えい意味でも出したたら悪いかなという遠慮があって、目立つことはいけないという雰囲気がある。

それでも、作業をしているときの気持ちについて子どもに意見を求めたら、いろいろ出てきました。「こういうのはなんかいやらしいので、いやな気持ち」「僕は喜んで切りました」「好きな人もおるけど、嫌な人もいるんやね。そういうのを環境型セクハラいうんやで」とか補足を入れながら。

そうしていたら「はい」で手が上がって、「首を切っているときにいやな気持ちになりました」という意見がでて。ここ（作品を示して）、首すげかえてあるんですよ。なるほどねって。そんなんだったらあるあるで。ここ名前変えてあるんですけど、それも。名前と顔とが変えられるのはおかしいて。

（自分が見本をつくる時に）顔とか名前とか切るのはそんな意識してなかったんですよ。そんなふうに自分のほうが気づかされることが多いです。

親のほうは、そんなこと全く思ってもない、気づいてないですね。だから、子どもばかりでした。子どもらの意見聞いて、ああそうかーと。なんだ、先生はただ楽しませただけじゃなかったのかということがわかったと。

・ジェンダーの授業実践に取り組むきっかけ

私は昔からこういう感じ（「女らしさ」から外れている：記録者注）なんで、「もうちょっとこうしたら？」といわれることが多かったんです。でも結局、男と女しかおらへんやんかというこだわりがずっとあったんですけど、前の学校にいたときに、部落解放研究の集會に、沖縄のエイサーが出るというので参加してみたら、エイサーの前にしゃべったのが、池田久美子さんだったんです。「私はレズビアンです」って話し始めて、「すごい人が出てきたー」って思って聞いてたら、男と女以外に人間ていっぱいあるのよ、ていう話で、私はすごいショックで。家帰ってインターネットで調べて、友だちとしゃべって、次の日子どもたちの前で1時間一生懸命しゃべって、職員室で喋って。

それが2月くらいだったんですが、4月から某大学で性の多様性概論が始まるというの

を新聞で見たんです。それを聴講に行きました。で、講師の方たちに連絡とらせてもらったりして、はまったというか。

性の多様性について知ったことで、男と女を分けることがほんとうにばかばかしいんだということがわかったんです。自分はぜったいここをおさえたいと思うし、それを知ったのは、今高1の子が5年生の時で、最近なんです(5年前)。

で、振り返ってみると、こんな自分やのに、いままで結構強制しとったなど。今でも悔やまれるんやけど、髪の色がうすくて女の子といっつも腕をくんで歩いている男の子がいて、いじめられていたんです。私は違う学年の担当で、自分はなんの声かけもせんかったなど。そういえばそんな子がおったなどが、自分がやってきたことがあかんかったなどと思う部分があって。だから自分はぜったいそこをおさえたいと思うわけです。

例えば、スロープを障害者のためにつくってあげてああよかったじゃなくて、自分が足捻挫したとき、業者の人が荷物運ぶときにもよかったとか、年に1回来るかどうかの障害者のために役だったというだけでなく、みんなにとってよかったとか、そういう話がいっぱいあるわけですね。だから、2000人1人とかって言っても、それで救われる人はほかにいっぱいある、ということも自分でわかってきて。でも、具体的に子どもたちにどう関わっていくかと言うことにはまだ自分に課題はあるし、周りの職員にも伝え切れてないなと思います。

・授業の位置づけ

ジェンダーや人権学習を、道徳の授業としてやってる人は多いです。

私、道徳についてはうるさいんですけど、先生たちはあんまり道徳の授業をどうしたらいいか、わかってないですね。なかば学級指導に使ったりして。ほんとに道徳ちゃんとやってるの?て疑問ですね。右翼は道徳復活とかやってるけど、ちゃんとやってもらったら復活してもらっていいんじゃないの?と思ってるくらいで、先生たちは子どもにいじめがあって、話し合いさせたりしたやつを道徳としてカウントして出す、とかいい加減な人が多いです。それよりは、読み物資料を使って考えると、ちょっとでもやったら思うんですけど。

ジェンダーの授業とかでする人も道徳の授業でする人は多いですけど、価値の押しつけになったらいけないのに、「はい、だから、みんながこうやってしなくちゃだめだよ」と先生が言って終わるとか、やってはいけない道徳をして、カウントをしている人はすごく多いと思います。

私自身は、こうした授業は、総合の中の人権でカウントしています。総合でやってます。

・成果

なんせ、閉鎖的な地域性があるって、人と違うということを人に言いたくないと思ってい

た子どもたちだったので、人と違って当たり前なんだなという認識が子どもたちにできたということがよかったかなと思ってますね。

3) 通常の教育・学習活動におけるジェンダー・バイアス解消の取り組み

* I先生は当該校に着任して1年であるので、主としてこの1年間の実践について振り返り、語っていただいた。

・基本的な姿勢

- ・ 児童を一人の人間ととらえて接する
- ・ 授業時間で勝負する
- ・ 税金をもらって仕事をしているという認識
- ・ 保護者の理解を得る
- ・ 職員室の仲間を増やす

私の基本的な姿勢なんですけど、子どもって思ったらあかんっていうのがすごいあるんですね。いくらちっちゃい子でも、すごく教えられることが多くって。一人の人間としてあなたたちと接したいと思っているよっていうことは、何年生を担当しても必ず言おうって思っているんです。だから、名前の呼び方も、名字にさんやと、うしろの親がみえかくれするような気がするので、みんなのことは下の名前でさんつけて呼びますって言って。くんとちゃんとか、そういうふう呼び分けるのは、いちいち瞬時におちんちんついてるかどうかを考えながら呼んでるということになるので、私はそういうのは好きではないので、さんで呼びますって言って。

前の学校では学校通してそうでしたが、ここではまだ個人の段階です。ただ、今年は組合でさんづけ呼称に取り組もうということになったので、ちょっと状況が変わってます。浸透されきれなかったんで、結構不発には終わってるんですけどね。

自分は、子どもに学力つけるためにお金もうてるということを忘れてあかんで、授業時間ほったらかしておいて何かの資料つくるとか、絶対あかんと思うし、授業時間は誰が見てもこれは文句いわんわというようなもんにしなあかんなと思ってますね。

あと、税金ももらって仕事をしているということを考えないと。それから、保護者の理解も。だから、ノートのやりとりは欠かせないですね。あと、職員の仲間を増やすってことも結構大事だと思っています。仕事の分担とか、すごい大事ですね。

ここ何年かで教育界でしめつけがあって、ばーっと変わって窮屈に感じたんですが、そのせいで逆にしっかり考えるというか。どこか、先生の仕事ってすぐ結果でやし、という開き直りがあったと思うんですけど、やっぱりそれって、年間で出さなあかんわなと。

透明性とか公平性とか、説明責任とか、やっぱり自分はそれをプラスにとらえてやっていかなあかなかなという部分がすごいあります。

・学級運営に関して

- ・一人一人が生きる場面を設定すること
- ・自主運営に任せるが、できないときは教師が先頭に立つこと
- ・思いを表出する場面を数多く設定すること（話し合い、担任と交換日記）
- ・くだらない取り組みはしないこと、おもしろいことしかしないこと
- ・自分の頭で考えてから行動させること
- ・アンテナを張らせること
- ・テーマを設定した人権学習に取り組むこと
- ・納得のいかないことはとことん話し合いをさせること
- ・授業は進度が遅れないようにし、学力をつけることを一番の目標とすること
- ・コミュニケーション能力を高める授業を創造すること

一人一人がいける場面を設定するというのは大事だと思っています。私がよくやるのは、イベントの時、一人一役なんかするということ。

こないだ音楽の学期末の授業に、ミニミニコンサートっていってみんなが出し物するんだというので、先生来て下さって言われたので、行ったんです。そうしたらね、イントロクイズをしますっていうんですけど、へたくそなんですね、クイズの進行が。ラジカセに、今からイントロクイズ始めますーて。男の子が3人でやっとするんですけど、3人で前に並んで、で局をかけてぶつと切るやんか、はいはいはいーていうて手を挙げて、前の子にあてて「誰々さん、はい、あたり」（と小さい声で）、なんていったのか後ろまで聞こえて来ないんだけどとかいう状態で。

次どうするのかなーて思ってたら、誰も知らなくて、結局一曲ずっと聞いてたんですよ。6年のね、遊びとは思えない。どうすんねんて思って。それが2学期だったんですね。で、忘年会するぞって、一人一つ隠し芸するぞーて。

で、劇やろうぜーという子らはそれなりにやりましたわ。で、劇でも、「のびた、男なんだからもっとケンカ強くなれー」とかいうシーンがあって、言うたろうかなと思ったんですが、そこはまあ流して。劇は2つグループがあって。

で、またイントロクイズやらなあかなったグループがあって。指導入れて。CDもってこい。先生かかわってやるで。みんながしっとる歌入れろーて。ほんで、パソコンでくめるやる？ていったらできますーていうから。でやらして。で、なんでここまで指導せなあかんねんて思いながら。

あと、ちょっとお姉さんな子たちは、歌を歌うとかって言ってたんだけど、絶対声聞こえやんやろーって感じなので、「わかった、先生のところにビデオがある」って言って見せて、理科室でパラパラ練習させて踊らせて。マイアヒ。

最後に、ぼーとした男の子たちが一人一人余ってしまって、4人。「先生、やることない」「なんかあらへんのか。図書室行って、あるだけのな、手品の本、もってこいー」って持ってこさせてトランプマジックをすることにして。「マジックを始めます」「このカードを瞬間にかくします」って、すでに見えとるやんかーという調子でしたけどね。その子は、一人、5年生の時にいじめられてた子で、掃除の時に誰にも机つってもらえへんだった子だったんだけど。

こういうふうは無理矢理させて、でもそれがすごいわかったみたいで、そんな感じのいろいろ、なんでもええでやれっていうのを、いっぱい設定することが大事かなって思いましたね。その時点で男女別れたりとかは、もうどうでもえいかなって。で、それは一回しかできなかつたんですけど、もっといっぱい設定したらもっといろいろやったやろうなて。

あと、なにか事件が起こったときに、たとえば、誰々さんの作品が壊されてたって時に、「先生、私の作品が壊されとる」って言ってきたらそれが問題なのであって。「誰かが壊したのかもしれない」ではなくて、「壊されている！」と感じる状況を周りがつくってる。そういう視点をいつももたなあかんと思ってるんで。自然と壊れたということが考えにくいのであれば、知らない間に誰かがしてしまったと考えられると、でもその子が誰かに(意図的に)壊されてしまった、誰かが壊してしまったに違いないと感じるとしたら、この学級としてさびしいやんなて。あのこがえらいそんなふうで、思わせるような言動をしてきてしまったていう発言がでてきたりとかね。誰々さんに何年生の時からむかつくことがあってさ、無視したりしとったんさ、で誰かが壊したとかこの学級のことを思うかもしれんけど、そんなつもりじゃないんだよ、という話をするとか。いつも自分の問題として返していく、とか。自分だったらどうなのかとか、そのことを自分はどう考えるのかとか、自分のことでせいっぱいというんじゃないで、その周りを見れるだけの余裕をもつとか、その余裕がなかった自分に気づくとかいうことですね。それをいつも。

・係活動

係活動も、一人一人がいきるようなそういう活動にしたいと思っています。

一学期に、これまでどんな係があったの?て聞いたら、牛乳パック係というて、紙パックを集めて下に持って行くという係、牛乳パックの籠を洗う係があると。その籠って牛乳がこびりついてものすごい臭うんですよ。それって、やりたい人あるの?てきいたら、じゃんけんで負けた人がやってまして。そんなもん1学期ずっとやってるのってなあ、って、そんなもん当番でまわせって言って、係活動好きなもんやれーっていって。

でもね、できないのね、今までやったことないから。私ね、今まで、穴掘り係とかおって、低学年で。校長先生に許可とって、どの場初やったら穴掘っていいといわれたらメートルくらい穴掘ったら、昔の校舎の瓦とかいっぱい出てきたね。それで、学級で発表して、とかいう係があったんですよ。あとね、刑事係とかいって、教頭先生の後をずっとついていって、とか、あと、給食の人の刑事係とかいうのもあって、朝は何時から来ているそうですとかいうのを帰りの会で報告して。例えば用務員さんは、一日に2回、遞送といって、市民センターに行って、（四日市市内をグルグル車がまわって）郵便物が届くようなシステムがあるんです。1日に二回センターに行って、て先生方への文書を取りにいっているらしい、とかいうのを取材してきたりしてそれもおもしろかったのね。

そういうの(好奇心を持たせるような不思議体験)をいっぱいさせることが大事かなと。

それから、さっきのコミュニケーション能力じゃないですけど、話し合い重視でやっていくこと。「言ってこい」って言っても、やっぱりみんなの前で言う人は限られているので、一対一の交換日記をずっとしてます。あとはおもしろくないことはしない、とかね。

・班きめと男女混合の組み体操

この学校では、男女混ぜるのが当然ということで、班の男女別の人数を設定してからメンバーを決めるというふうにしていたようなんです。「今までどうやって決めてたんや？」て聞いたら、そうしてきたと生徒が言っていたので。

生徒が年度の始めに、「先生、そろそろ班決めしたい」って言ってきてね。「先生、どうやって決めるの？」「決めるの？て、きみらの班やからきみらがいいようにしたら？」「どうしよう？」「好きなもんどうしがいい」。そうしたら「好きなもん同士は仲間はずれができるからよくないと思います」という子が出てきて。

私はそういうとき「仲間はずれにしたったらえいやん」という考えなんです。極端な考えだと思うんですけど、仲間はずれしないようにならず声をかけるようにするんだよってというのは、先生の側のおこがましさを感じてしまうのね。そんなふうにして声をかけられるほうがつらい。ひとりぼっちになる子は、それなりに理由があるんですよ。見てるととても暴力的だとか、控えめすぎるとか。ひとりぼっちになる経験を奪ったらあかんと思う。すごくきびしいんやけど。もちろん、そればかりはあかんけど。で、生徒の好きに決めさせました。ひとりぼっちにさせたらあかんというふうに通く子はおるので、それなりになんとかなります。

で、男女が別れて、しかし一回そういうふうにつくったら、ずっとそれなんですよ。せいぜい一人のメンバーが替わるだけで、でもまた戻ってきたり。それを喜んで二学期までしてたんですよ。まさかそんなことになると思わなくて。

こういうふうにできてしまった男女別のグループに対して、変化が起こるきっかけにな

ったのが、5, 6年生で合同で取り組んだ組み体操です。組技がいろいろあるんですが、そんなときに、生徒がこっそり入れ替わったりするんですよ。背の高い順に10人来て組む、とかやってたんですが、あの子とはいややとか、男の子と女の子が並んだらいやとかいって変わる子がおるわけ。

それで、そういうこっそりしたチェンジが多かったのは、うちのクラスやったんですよ。結局、班活動をはじめとして男女が混ざって行ってないから。で、それを自分らで解決するように、子どもらに課題で返したんです。修学旅行前だったんですけどね。これ(組み体操)は9月なんですけど、11月に修学旅行で。

そうしたら、「やっぱり班は混ざってつくろう!」という話になって、修学旅行に向けて、「一日に10人の異性を挨拶しよう」とか「班で交換日記をしよう」とか、生徒は自分たちで決めてました。(ひそかに)こんなあほくさいことようすんなーと思ってたら、すごく楽しかったみたいで、「男の子としゃべっても緊張しなくなりました」などという感想も聞かれました。「(ペニスが)ついてるかついてないか考えながらしゃべってたんかいー」とか言ってたんやけど。

4月から自分はこんな調子なもので、「そうやんねー」で乗ってくる子もおるんですけど、そういうことに抵抗感がとれてない子にとっては、こういう地道な取り組みもよかったみたいで、そこからまたクラスがまた変わっていったっていうのがありますね。

・宿泊研修時の風呂

高学年を持つことが多いもので、宿泊研修のときも、「こうやってわけたけど、どうしてもいややという人がいたら言ってこい」と。「例えばね、先生みたいに背中に刺青があって、みんなと一緒に風呂がいややなことがあったら、小さい風呂もあるんだよ」とかいうと、子どもはだいたい信じるのやけど。

そしたら、「先生、私、心臓の手術の傷があってそれ見られるのちょっといやや」っていった子があって、結局その子は別の機会にそのことをみんなの前で話してしまって、そしたらもう、みんなと一緒に風呂に入るわっていうことになったんだけど。性同一性障害なんてほとんどおらんやろうって思ってるかもしれないけど、そういうことじゃなくても、そうやって救われてくる子がおる。アトピーでいややという子もおったし。生理でいややという子もおったし。そんな感じでやってるんですけど。

・プールの水着

学校から出すプールの連絡の文書も、女兒って書いて水着の絵描いたり、男児って書いて海パンの絵とか描いてあったりするわけ。もうすぐ水泳指導が始まります、こんな水着を用意してくださいって、という文書で。だけど、こんな絵いらんやろー。イアン・ソープみたいな着てきてもオッケーでしょう?ていうて。アトピーで着たい子とかおるんで

すよね。掻いた傷を見られたくないとか。女の子もスクール水着とかいうて、今とても胸の発育のよい子とかいて。そんなもんはいらへん。ここも、ローレグタイプでもいややあって。そりゃ、ハーフパンツタイプのほうがすきやわ。

そしたら、水着は華美になるといけませんとかいう先生とかいるんやけど。赤とかはちょっとかいって。そしたら白とか着てくるやつとかでてくるんやわ。透けとるやろーお前とか(笑)ぜんぜんわかってない、その刺激的な、透けとるのはあかんよちょっと、色替えておいでとかいう子もおるけど。

・ランドセル

ここはね、ランドセルもね、登下校かならず持つてくることになってるんです。それもね、私、クラス27人で後ろから5番目だったんです。一番大きい子は182cmあったんです。3学期で。すごい大きい子はいっぱいおるのね、170クラスとか。やのに、ランドセル背負ってくるんですよ。入らないんですよ。女の子でも胸が大きい子がおって、ランドセルが入らないんです。そういう子はだいたい横幅もあるから。で、「いやなんちがうか？」てきいたら「いややけど、決まりはまもらなあかん」「いややったらいやって言え」と。「聞いたことあるのか」と聞いたらひとり「あります」という子がいて、なんていわれたんやと言ったら「後ろから刺されたときに大丈夫や」と。そうやって、助かった人が日本に何人いるか数えてみよっつって。そういう感じになるのね。言われたことはまもらなあかんていう感じだけど、いややったらいやっていうたらええやんて。

そういったところを一個一個子どもと一緒につめていくことが大事かなと自分は思っているもんで。そこを通してみていくとジェンダー・バイアスも見えてくるじゃない？ということ自分を大事にしていきたいと思ってるいろいろなことを書いてやってたりしてるんです。

・学校のトイレ掃除

私のクラスは、班の人数も好きなもん同士で勝手にさせているので、トイレ掃除のときとか大変なんです。女ばかりの班やったら、男子トイレを誰が掃除するねんとかいうことがあって。それをどないするんやっていう話になったら、それが問題になるから今までは男女を同数混ぜとったんやあって子どもはいうわけ。

そうしたら、トイレ掃除を男の子がしてたら入りにくいという子がいて。でも、私は誰が掃除してても掃除中にはトイレ入りにくいという子も出てきて、それやったら、掃除中はトイレはつかわんようにしといて、誰でも掃除しようやという話になって。

私は基本的にどっちのトイレ掃除も、どっちにもさせたいって思うんですわ。女の子のナプキンの処理とか、男の子にー？という話もあるけど、女の子だってそりゃ見たら気持ちいいもんじゃないし、そんなんは処理の仕方を徹底させたらいいわけで、なんでこんだ

けいこうっていったら、血液の感染の恐れがあるとか、誰でもみたら気持ちいいもんじゃないし、それだけ大人になった人のところに生理がくるんだとかちゃんと話をしたら、子どもらはきちっとできるようになるんですわ。

子どもたちの前でナプキンを折りたたむとかはせえへんのやけど、説明の紙書いてとかいうと、自分らで何枚か書いて貼りに行くわ。だいたいすぐにきれいに捨てられるようになるし。

私の中学生のころに、女子トイレにナプキンの自販機があったんですね、そうしたら女子トイレで工事があって、中の備品が全部廊下に出されてきたんですよ。そしたら、同級生の男の子が、これはなに？と言って、お金入れて買ってたんですよ。廊下で。それを見たときに、自分はよう注意せんだったけど、今思うとそれはおかしいなと思うんですよ。自分の学校で販売されているものを男の子だけ知らないっておかしいと。そんなんておかしいと思うし、工事するのも、男も女も両方の視点があることが大事じゃないかと思うので、自分はいっぱい混ぜていきたいなと。

それでも、いややて思ったら、言ってこいやって感じなんです。今までと違ったやり方でやっていくんだけど、それがいややったらまたいやといえるような関係をつくっておかなあかんということですね。

・体育の授業について

男女まったく一緒にしているんですけどね、運動会は今年から一緒にしたんです。私が来たもんで、私の相担が気を利かして、先に決めてた。でもよその学校ではそうになってないところはたくさんありますね。やってみて、なんの苦情もでませんでしたね。

でも、過去にはありましたよ、苦情が出たときも。(男女一緒に)走らせる段になって、親がダーと走ってきて。うちの子女の子やのに、一人だけ(男子に混じらせて走らせて)どべになったらどないしてくれるんですかーっていうて、連れて帰っちゃった、とかいうことがあったそうです。それは、その人のジェンダー観の問題というよりは、その人にそうさせてしまう、学校の人間関係が問題だと思います。

つまり、なにを大事にするかをどれだけ共通認識にしているか、ということが問われ r 増すよね。いろんなことを大事にするということが、なぜ、運動会で(男女を)混ぜることになるか、というそういうことの理論建てとか、全職員がきちりわかっておって、ふだんからその実践をやれているか、確認できていればそういうことはないと思うんです。そこが弱いと、なんか言われたからやめとこってなりますね。

一番大事なのはみんなのことを大事にしようということで、下の子がでんようにしようて。女のなかで遅れてかっこう悪いと思う子がいたら、そこは考えていこうに。そういうふうに、どべでも恥ずかしくない雰囲気をつくっていくとかね、いろいろやりかたはあると思うんやけどね。

・学校環境全体として

(学校による違いについて)私も、前の学校では、今と全然違いますね。結局男と女しかないやんって思ってたし、部落問題もいまいぢめんどくさいなって思ってたし。ある先生がきてすごく変わって。その変わる波に自分もうまく乗ったって感じで。その先生が出て行かれても自分が、っていう感じでやってきましたね。

そうですね、学校の雰囲気は、たった一人の先生で変わったりしますね。管理職も大きいですね。そういうこと(人権やジェンダーにかかわる取り組み)を通して人間関係をつくっていくのが、職場でも楽しいですね。

学校環境整備として意識しているのは、校務分掌を男女関係なく決めるということ。今年、学級で選出する代表委員会というのがありますが、児童会の下。それに(男女別の)定員があったんですが、それをなくしたとか。徒競走や長距離走は混ぜるとか。身体測定はうち、別ですわ。来年は保健の先生が替わるので一緒にやらしてもらおうと思って。保健関係の名簿は男女分かれてるんですけど、保健の先生は知らないですね、男女一緒にしていいということ。でも一緒にできるので。尿検査も、全然関係ないらしいんですわ。だけど男女別って言われるんですね。男女混合名簿になってるけど、保健だけ別って考えてる人がいるらしいけど、実は一緒にできるらしいので。来年度は変えていきたいなと思っているんです。

あと、職員室で給食食べる先生いますよね。そのときの配膳って、ジェンダーの度合いができるんですよ。男の先生がいっさいしない学校とかけっこうあるんですけど、そこは率先してやるようにしている人もいます。で、「書いておいてください!」て隣の席の先生(学年でペアを組んでいる男性の教員)が言ってました。が、その先生はほんとにやりますね。来客時のお茶だしでも。

うちの学校は、各学年が2人ずつくらいになって男女ペアになるんですね。そうすると、女の先生は前に出ないで、男の先生ばかり子どもの前で指示する役。女の人ほうんうんと後ろで聞いている役。年間それやと刷り込みですよ。だから、今年は私が出た。で、急に来たこの人だれ?て子どもら思ってたさうけど。それを見せることですり込みが減ってくるでーって言ってたんだけど、そのへんは意識的に、自分も設定していかなあかんかなと。もっというと、私みたいなタイプよりも、もっと「普通の女性」というか、やとえいと思うんですけど。なかなか難しいですね。

学年でペアを組んでいるその男性教師は、授業中は「わたし」呼称。私も、子どもたちの前で「先生は」て言わないで「私」て言ってるんですけど。彼は「おれ」とかいいそんな雰囲気なんだけど、授業中は必ず「わたし」。だから、語尾も優しくなるし、彼の授業を見てそう思いましたね。すごいいい雰囲気なんだなと思って。

作業時や緊急時の仕事の割り振りについても、例えば、「女の先生たちはぞうきんもって向こう行って下さい」というのが平気である学校も結構多いんですね。子どもたちにも卒業式の準備とかにかかるときに、「男の子、みんなで机つこか」とかいう人があるんやけど、そうじゃなくて「力自慢5人こっちこい」とか言うのと違うよねっていつも言ってるんですよ。職員とかでも、「今から大きい棚つるで、男の先生5,6人来て下さい」ではなくて、て校長先生に言っています。腰の痛い誰々さん(男の先生)は来れないじゃないですか、て言ってます。

今日も机と椅子の移動があったんです。教室が変わるんですよ。今使ってる6年生の教室が3年生の教室とかになると、ちっちゃい机に全部入れ替えなんですよ。それ結構すごいへんなんですわ。で、学級の数が変わったりするもんで。今日はそれで机と椅子を運んだんですけど、私はね、いっぺんに机を三つ持って。そういうところを子どもに見せないとダメと思って。でもまあやりすぎもあかんのですけどね。みんなが働くという姿勢なんじゃないのかなあって。

・保護者からの反応

家庭は学校行事に協力的で、苦情はないです。

一部の人の反感をびびってるんでなくてやっていきたいですね。一部のどうしても受け入れられない人はしょうがないんですけど、やってもらってかえってこまったというような人が出るような授業はしたらあかんかなと。やってもらったおかげでつらなってきたとか、その時間はずっと耐えとったとかいう子が出るような授業はしたらあかんかなと思ってるんですけど。

私、結構めめなんです。子どもたちの連絡帳は毎日チェックする。で、ここ書いていないーとか、日付は書いてないーとか、結構やりとりするんです。で、オッケー出す、親に見せる、親のはんこもらえて返す。学級通信を別途出しているんですけど、毎日出せないの、最後に連絡帳の下に2行くらい、今日あったことを書かかせるんですよ。今日決まったこととか、参観日になんの授業をするか決まったけど、通信に書くのを忘れたから書かせておく、とか。で、それを見せてはんこもらせてきたりするんやけど。授業参観の次の日には必ず全員に書くんです。お忙しいところきてもらってどうのこうのと、そうすると半分くらい返事がありますね。いやーとても楽しかったどうのこうのと、先生はこうおっしゃっておられたけど、こうじゃないかと思いましたが、とか。またそれには返事書いて、というふうにしています。

去年までの連絡帳を見てみると、先生が見た形跡もない、子どもの落書きだらけ、そんな感じから見たら、ようやってもらってるなという感じになると思いますね。

6年生にもなると、恥ずかしいと思うんですよ、親がこう書いてきたとかいって持つ

てくるのは。でもね、そうしてもらうのはうれしいみたいで、またこんな書いてきた、とかいってうれしそうに持ってきたりとかしますね。

あと、参観に来てもらった人とは、かならず全員としゃべるようにしています。一対一で。子どもの見ている前で。休み時間とか、終わったあととか。絶対にそれを見せないで。参観日ってね、子どもはうちの親きてるかなとか、誰の親と仲えいんかな、先生と仲えいんかな、というその3つしか見てないんですよ。そこは絶対アピールしなあかんのね、子どもに。

そうすると少々なんかあっても、なんとなくよくなるんですよ。それはジェンダーとは関係ないんやけど、あの人やでまあ正しいんかなと思わせるといふか。そういうふうに分は思っちゃってますね。

あとまあ、そんなことばかりやっとなで、授業おくれるやないかーて、保護者から言われるとかなわんの、完璧にこなして。(進度は)遅れないように。やっぱり塾とかいってるので、知ってるでしょう。だいじょうぶやねん、これは絶対追いつくねん。後からやることを今やっとなやでとか、うまいこと言って。

先生とか、結構、テストを束で買って、使わないでほったりするんですよ。この2回のテスト、できやなかったわーとかいってほる人おるのね。でも、親のお金徴収してやっ取るからには、必ずやると。きみら、このテストでいくらかかると思うー？て話を必ずして。あかんからって、丸めてほるようなことやったらあかんねんでーって。人のはろうてもろうたお金でテスト買ってもらって、先生に採点つけられてこういう結果やったっていうのは必ず見せなあかん。ていうたら見せるようになりますね。なんにも言わんと返してたらね。

そうですね、最初のうち言われたのは、部落問題より、算数の授業やってくださいって。保護者に。部落問題について(学習して)なんか変わったなという手応えを感じていない、親が理解していない、算数についても不信感をいただいている、先生もあかん、と重なってるんですよ。だから、算数は遅れないし、学校に対してもね、あの先生はあかんやろけど、あの学校におるんやからなんとかしてくれるやろーとかね、学校に対する信頼感とか、先生個人に対する信頼感とか、部落問題でもこういうふうによくなりましたーというアピールとかね。文書も必ず出すようにするとかしていかないといけないと思っています。

4) 生徒の現状について

- ・三世代同居の家庭も多く、また家庭でのバイアスが強く、加えて学校ではジェンダーに敏感ではない職員の姿勢もあるため、全体的にジェンダーバイアスが強くかかっている。
- ・転出入が少ないためか、多様性が身についておらず、ジェンダーに限らず閉鎖的。
- ・スポーツ少年団の活動が盛んで、男女を分けた放課後のスポーツクラブに参加している子が多い。
- ・友人関係も閉鎖的で、放っておくと、一部の仲のよい子とだけしか関わろうとしない。トラブルが起こったときに修復した経験が少ない。
- ・人間関係を広くつくるのが、全体的に苦手。
- ・教師の言うことは絶対に正しいと思っているため、「男女混ざるように」と指示されると従う。
- ・家庭や地域は学校行事に協力的で、苦情が少ない。

・地域として

子どもたちは基本的に（自分の思ってることを）外に出さない生徒が多いですね。

・男女別に行動したがる傾向

生徒に、「今から図書館行くぜ、はよ廊下に並べや」というと並ぶんですけど、好きな順番に並ばせると、女の子は男の子を前に行かせて、女の子同士固まって後ろに行くんですよね。「いちばーん！」みたいな感じで来ていた女の子が、男の子が前に来ると、すーと後ろに下がるんですよ。何回かそういうのがあって、最初は私、ほうっておくんですわごと。

で、しばらくして問いかけてみました。図書館のパソコン室で調べ物するのが好きかたずねたら、生徒は「すごい楽しみ」というんです。「楽しみにしている割に並ぶのにすごい時間かかるやんかー、どう思う？」て聞いたら「そう思う」というのね。「そうしたら、並ぶだけにグダグダ時間かかってパソコンする時間が減ると、さっと並んで移動するのとどっちを選ぶ？」て聞いたら、「さっと並んで、はよしたい」て。そうしたら、好き嫌いも言わないで、来た者順にささっと並んで行く、ていうようになりましたね。そういうふうにしなさいなことを提示していくということが大事なかと。

子どもの実態としてそういうことがすごく多いです。

・学年をおっての変化

6年生ではもう遅いですね。ジェンダーのバイアスとることを考えると、遅いですね。

もうなんともならない。それはプライドとか、人間関係とか、もうできあがってる。精神的にもだいができあがってきてるので、自分のキャラクターではそれはできません、とかいう感じになってしまう。

低学年で、話し合いで物事を解決するというのを徹底にやらせて、3、4年で不思議な活動をいっぱいさせて、穴掘るでもなんでも。それで高学年で社会的な問題をしっかり考えていくというか、地域に働きかけていくとかというのが理想かなと思いますね。

5) その他

・教員のジェンダーバイアス

(教員のなかには)男と女に分けるのは普通という感じがあって、ふと気づくと「男ばかりや」とか、そういう言葉がすぐ出るんですわ。職員が変わっていくのが大事かなと思います。生徒には、ほっといてもバイアスがかかってきますよね。あえてそれを崩すことをしない限りは無理じゃないかなと思うし、分けることのあほらしさというのを感じることが多いです。

<研究授業の後で> 多様な性ということで理解してくれるのは、未婚、30代、40代の女性が多いです。子どもを産んでない私も楽になったって思ってもらえるみたいで。今までの中ではそういう人たちが一番手ごたえがありますね。かえって、べたべたの主婦とか、遅い感じがしますね。そんななっけもしもうたら、うちの子、困るがなーみたいな。保護者でもそうです。男であることにしがみついていないといられないような職員とかはえらい理解遅いなと思うけど、でも、ぜんぜんそうじゃない人もいます。

・教材について

ハーモニーという冊子(副教材)があるんです。これは県教委が出しているものですが、組合が作れとって要求して作って、全部ジェンダーの問題についてのものです。これは5年生が使うようにできています。

私はほとんど使わないんですが、なぜ使わないか(使うところもあるんですけども)というと、例えば、一番最初に「男の子の色と、女の子の色と決まっているのかな?」という質問がいやらしいね。決まっていなと言わしたい、みたいな。こういうのがいちいち気にいらなくて。これは全校配布されているんですが、学校単位では40冊くらいしかなくて、必要などだけコピーして使ったりするんです。この教材を使ってやってる人は、ここの県では多いと思います。

教科書でもこれ、どやねんという話多いですよ。そうですね、何の本やったかが、学級で男が何人いました。男の子が何人変わりました、女の子は何人残っているでしょう。みたいな問題があるでしょう? だいたい、これおかしいでしょう、これで。男の残りは女とかいうのは、どうです? 子どもたちは、ああ、また始まったーみたいな感じで、別にね、

かえたらいいんですよ、こんなもんとかいうて。

それから、提示する資料ですね。この「なかま」という資料でも、例えば「りょうこの出産」とあるけど、女の子はチャンで、男の子はくんで書いてあるとかね、いちいちそういうのがあるけど自分で打ち直してさんで統一させるとか。そういうのもまめにしますね。あと、本を資料で使うときも、選択する時点で、男と女で同じ体操服で描いているのを選んでおくとか、その辺は細かくしますかね。

・来年度の展望として

<学級に対して>

基礎学力の充実、基本的な生活習慣の確立

自分の思いを出すことが楽しいと感じる経験をたくさんさせる

クリエイティブな係活動

体験型学習

納得いくまで話し合える学級

<学校に対して>

系統立てた性教育の推進

人権を大切にされた教育実践の徹底

公平に近い校務分掌の割り振り

保護者の学校教育への参加の呼びかけ

新しい教材、資料の発掘や作成

職員の仲間づくり

基礎学力を身につけさせるための授業の展開の研修

*注) 枠囲みの文章は、ヒアリングに際して、I先生が事前に用意して下さった資料にもとづく。

(記録作成：中澤)